

宇井先生の思い出

桜井国俊

私をはじめ宇井先生と出会ったのは、1964年、今から40年近くも前のことである。新しく出来た東京大学工学部都市工学科の一期生として駒場から進学したときに、助手として着任し、水質実験の実習でわれわれ衛生工学コース一期生10名を厳しく指導して下さったのが宇井先生だ。

助手だから授業は担当されなかったが、後に助手に着任された中西準子先生（現横浜国立大学教授）とともに、実力が抜群であることは一目でわかった。しかし東大土木の出身者で教授・助教授をかためたこのコースでは、応用化学出身のお二人は万年助手にとどまり、土木出身の大学院生が次々とお二人を飛び越えて昇進していくことになる。遅まきながら世の中には矛盾があると実感することとなった。

その後、私は大学院に進学して修士を終え、1968年に博士課程へ進んだ。そのまま何事もなければ、多分大学に残ることになったであろう。

しかし68年5月、東大では医学部学生不当処分をきっかけに大学のあり方を問う東大闘争が勃発する。都市計画の審議会や、高度成長の過程で多発した公害問題に関して、政府の御用学者として発言を繰り返すことの多い都市工学科の教官たちを見ていたわれわれ大学院生は、医学部学生の運動に呼応して東大にNONの声を上げた。そして都市工学科は、東大闘争での最大激震地となっていたのである。68年は宇井先生がWHOのフェローとしてヨーロッパ留学をされた年である。オランダでパスピア博士に会い、酸化溝法の伝授を受け、後の宇井先生の活動の大きな礎となったのがこの留学だ。パリの5月など、世界中の大学が燃えた年に、宇井先生はヨーロッパで東大闘争

の成り行きを案じておられたに違いない。

69年1月には安田講堂での学生と機動隊の攻防があり、宇井先生が日本に戻られたときには、東大闘争は学生の敗北で終結していた。われわれ衛生工学の大学院生は、大学を出て地域闘争に入ることになる。高度成長の過程で頻発した公害問題に、教官のように加害者の側に立つのではなく、専門性を生かして水質汚染のデータを取り、被害者の主張に役立てようと意図したのである。

われわれが最も深く関わったのは、富士田子の浦の製紙工場による汚染への反対運動であった。私の指導教官が審議会の委員長だったからである。そうした地域闘争の一環として復帰前の70年に沖縄を訪れた。中城湾の東洋石油建設反対運動の支援のためである。波の上丸で鹿児島経由で訪れたこの旅が、沖縄へのはじめての旅であった。出発前に宇井先生から当時としては大金の5000円のカンパを頂いたことを今でも覚えている。

それから丁度30年後の2000年、私は宇井先生のお誘いで、沖縄大学に勤めることになった。その経緯は話せば長くなるのでまたの機会に譲ることにしよう。宇井先生には、本当にお世話になった。この場を借りてこころより御礼を申し上げる。これからもお元気でわれわれ後輩を叱咤激励し、日本や世界の行く末についてますます盛んなご発言をして頂きたい。